前常務理事大森健二氏を偲んで

川上　貢

本協会の前常務理事大森健二氏は平成13年４月22日に逝去された。享年77歳、喜寿の誕生日を過ぎたばかりであった。謹んで哀悼の意を表します。

はじめに氏の経歴を紹介しておくと、大正12年に京都市で生まれ、小学校を卒えて、京都府立第三中学校から神戸高等工業学校機械科に進学し、昭和18年に卒業、陸軍に召集され、軍務に努め、中尉に任官、敗戦で復員された。

昭和21年５月に京都帝国大学工学部建築学科に入学、同24年３月に同学を卒業、大学院に一時籍を置くが、同年に京都府教育委員会事務局文化財保護課に就職された。

府下の国文化財指定建造物の修理を担当され、金地院八窓茶席の修理を皮切りに高台寺開山堂、北野天満宮、大報恩寺本堂、平等院鳳凰堂、醍醐寺五重塔などの現場勤務がつづいた。その存在に注目されるようになって、滋賀県に転任、円光寺本堂、延暦寺転法輪堂、彦根城天守の各修理監督を勤め、再び京都府に戻って大徳寺塔頭竜源院本堂と表門、海住山寺五重塔、慈照寺東求堂の修理監督の任にあった。

昭和40年に京都府を退職し、財団法人建築研究協会日本建築研究室に迎えられ、逝去の日まで35か年の長い期間を日本の伝統的建築の設計、監理にたずさわり、のち常務理事を勤め、協会の発展に大きく貢献している。

京都市内をはじめとし各地の社寺の建築を設計されていて、その主な作品には千葉県成田山新勝寺大塔、京都市西芳寺本堂、三重塔、同智積院本堂、同平安神宮本殿、福井市養浩館書院・茶屋群、東京都湯島神社社殿、同伝通院本堂などがあげられる。

氏と私は大学が同期で、はじめて出会ってからともに学んで半世紀余もの永きにわたり深く交わった間柄であった。クラスのなかでは年長で、歌舞伎をはじめ古典芸能に詳しい趣味人で、晩年に小唄に凝った渋い趣味も若いときからのもので長くつづいた。また、学生のころ京都の古社寺をともに見学してまわり、同じ村田治郎教授のゼミに属して、大徳寺や南禅寺の茶室の実測に参加した。文学部の考古学教室で開講された法隆寺技師浅野清氏の特別集中講義を受けに行き、同講師の法隆寺修理における豊かな修理の実際や調査手法の開発の苦心など、文化財修理への目がひらかれ、関心を強くしたことは氏も同様であったろう。

大森　健二氏

氏が大学を卒業し、京都府の文化財保護課に勤め、市内の修理現場に勤めていた頃、暇をみつけては現場にお邪魔して、修理の実際について多くを学ぶ良い経験をしたのも氏のお蔭である。北野天満宮の屋根替修理現場を訪ね、檜皮の皮の調製や葺きの手順を学んだのもその一つである。昭和26年から始まった

大報恩寺本堂の解体修理現場に何遍かお邪魔し、氏が解明した当初の中世の小屋構造の調査経緯をきき、現場の状況を見学した。このときの調査・研究の成果は、氏の中世の本堂建築に関わる構造と意匠の技術の解明に有用な多くの知見を見いだした。のちに担当された平等院鳳凰堂や醍醐寺五重塔の修理でえられた軒や斗拱の木割りの技術に関する研究業績を先の業績にあわせてまとめた学位論文「中世建築における構造と技術の発達について」を京都大学に提出し、工学博士の学位を授与されている。また、この論文による業績により昭和43年に日本建築学会から学会賞（論文）を受けている。

近著「社寺建築の技術－中世を主とした歴史・技法・意匠」（理工学社、平成10年刊）は日本の伝統的木造建築、とくに社寺建築の設計基準の技術の、今日にいたるまでの歴史的変遷を考察し、学位論文を基本に中世の建築各部にみる構造と意匠の発達の過程を明らかにし、加えてこれまで200棟をこえる社寺建築を実際に設計された豊かな経験にもとづく設計の要点にも言及されていて、社寺の伝統的建築の設計に携わる技術者への価値ある指針となる高著といえる。

学生のときから建築の設計課題に強い意欲を示し、楽しい図面を仕上げていたが、晩年まで製図板に向い、図を引くのが楽しみであったようで、上出のように多くの優れた作品を世に送り出したことに敬意を表したい。なお、協会業務のためとはいえ現地での打ち合せや指導、監理にまめに足を運び、各地への出張で多忙の日々をすごしていた。

氏の酒への愛着は若いときから晩年まで変わることなく、また、読書家でもあったため、話題が豊富で、飲むほどに舌の回りも滑らかになり、周りの人々を楽しませた。一昨年の11月に卒業50年を記念してクラス会を大阪でもち、わずか６人しか参会しなかったが、氏も出席し何時もと変わりのない様子で安心し、京都へ帰る氏と同じ電車に乗り途中で別れた。亡くなる前の正月早々の拙宅の葬儀にわざわざにお参りしていただいたときにお会いしたが、それから間なしに入院を知らされた。４月18日、ご長男から連絡をうけ、病院に見舞ったのが氏との永の別れになった。あらためてここに氏との多年におよぶご交誼に感謝し、心からご冥福をお祈りしたい。